令和６年度　幼児教育研修（年齢別担任研修２歳児・第３回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
～２歳児の世界に寄り添い楽しむ～
日時：令和６年１１月１２日（火）１５：００～１７：００
会場：ギャラクシティ
講師：相模女子大学　教授　金元 あゆみ 氏

第１回、第2回の研修を振り返りながら、受講生の質問に答えていただきました。

Q&A　「横並びのまなざし」を意識しても、それが子どもの気持ちと合っているか分からない

・「正解探し」よりも、知ろうとする・分かろうとする姿勢が大事
・「違うかも」と思いつつも、横並びのまなざしで見えてきた景色・聴こえてきた訴えを手立てに応答する
それに対して、子どもも応答し、教えてくれる
・気持ちの理解が違ったら軌道修正をする。「それじゃなかったけど、それもいいね！」となることもある
・子どもにとって「自分の気持ちを当ててくれる人」よりも、「同じ世界を見ようとしてくれる人」を目指す
これこそが横並びのまなざしである

Q&A　ずっと同じことを繰り返している。他の遊びを提案する？今の遊びを盛り上げる？見守る？

・「子どもにとっての遊び」になっているかを見極める
・子どもの遊びには、完成（ゴール）がないこともある
・大人から見ると冗長で退屈に感じられる「遊びに見えないこと」「物足りなさを感じること」でも、子どもが没頭しているなら、それは「子どもにとっての遊び」である
・子どもの手つき、表情、仕草やつぶやき、目線の先にあるものを横並びのまなざしで眺めると、不思議と「（私とは異なる）その子の世界」の面白さに出会える　→「同感」や「分からなさ」から「共感」へいざなわれる

映像を見て、子どもの願いや保育者の関わりについて学びました。
「市販DVDのため、事例は省略」

子どもの世界が見えてくる面白さ

子ども同士のトラブルの場面

子どもの気持ち

- A児は、大人が自分にしてくれるようにB児を抱きしめ、 頭を撫でて安心させようとしている。
  → 「私は悪くない」ではなく、相手の「悲しい」という気持ちに寄り添おうとしている。
- 一連の流れを見ていたC児が、誤解を解くため仲裁に入り、最後はA児を遊びに誘う。
  → B児に寄り添うA児の気持ちに寄り添おうとする姿

子ども同士のトラブルの中で、自分とは異なる相手の気持ちに出会う。保育者の温かい援助（温かいまなざし、安心する関わり、嬉しい言葉かけ）を受けながら、自分の気持ちを調整したり相手の気持ちに寄り添ったりする姿が育っていく。

→関わりの連鎖〈自分がしてもらったように相手にもしようとする〉

保育者は、子ども同士のトラブルや強い自己主張に出会うと「困った」「難しい」と感じ、対応に戸惑ってしまうことが多い。しかし、子どもの気持ちが見えてくると愛おしい姿に変わってくる。

映像から読み取れるD児の願い、葛藤、自分で気持ちを立て直していく過程

保育者の関わり

- 子どもたちの気持ちを代弁をしながら、子どもに寄り添う関わりをしている。
- 子どもの気持ちが変わるのを辛抱強く待ち、見守っている。
- 互いの思いを交わし合う中で生まれた「想定外」「おどろき」などを一緒に楽しむ。（子どもの力を信じる）

受講生の気付き

子どもたちが遊ぶ姿を先回りして保育者が提案するのではなく、見守ることの大切さを学んだ。今声掛けが必要かどうか見極めることが大事であると知った。

子どものもつ力を信じ、焦らず見守っていくことで、子どもたち自ら相手を思いやる行動が生まれたり気にかけたりする様子も見られることがわかった。

子どもとの対話でつくる豊かな遊び

個々に異なる思いを抱きながらも、同じ場を共有し互いに感じている面白さを交わし合っている場面

子どもの気持ち

- それぞれがやりたいことを楽しんでいる。どの子どもに焦点をあてるかで見え方が違ってくる。
- 「自分が楽しいと思うこと」だけではなく、他児が感じている面白さにも気づいている。
- それぞれの思いが繋がったり、そこから新たな発想を得たりしながら遊びが継続している。

保育者は、子どもの発想や楽しんでいることを肯定的に受け止め、自らも遊びを面白がっている。

計画に子どもを当てはめていく実践ではなく、子どもの姿と対話しながら保育を展開していく。保育者自身も面白がることで、豊かな遊びに発展していく。

受講生の気付き

保育者が子どもの行動に共感しおもしろがりながら関わることで、より子どものおもしろさを引き出しているように感じた。

子どもの気持ちを受け止めながら、環境設定を考えること、保育者の関わりによって、子ども同士の認め合いにつながったり遊びが発展していったりするのだと学んだ。

最後に

2歳児は、自己主張の強い時期であると同時に、うまく表現できないもどかしさに葛藤する時期でもあります。そうした子どもの姿に悩むことも多く、大人の思う「望ましい姿」に向かう手立てを模索しがちになりますが、思いを交わし合う関係性は、あるがままの姿を受け止め「ともに」のまなざしで関わる中で築かれていきます。子どもの世界が見えてくると、心が動かされ、保育が変わっていきます。
育ちを急ぎすぎず、ともに悩み、ともに考え、ともに楽しむ2歳児の保育を面白がりながら味わってください。

研修生の報告書より

「横並びのまなざし」から、子どもの思いを知ろうとする、分かろうとする姿勢が大切であり、「ともに」のまなざしで思いを交わし合う関係性が築かれていくことを改めて学んだ。保育者が子どもを分かろうとするように、子どもも、保育者のまなざしから思いを感じ取っていると感じた。

事例紹介では、子どもたちの優しさに触れることができた。子どもたちの優しさには、保育者の丁寧な関わりがあり、子どもの中で優しさが育っていくということを聞いて、さらに温かい気持ちになった。改めて結果を急ぐことなく、横並びのまなざしで関わることの大切さを実感した。

大人から見ると、遊びに見えなかったり物足りなさや退屈さを感じたりすることもある。しかし、それは子どもにとっては遊びであり、見方を変えるだけで子どもの感じている世界を知ることができる。遊びにゴールがないことを理解し、見守ることを大事にしていきたいと思った。

保育者としてずっと大切にしたい心持ちを学べた。望ましい姿に向かうばかりではなく、一人一人の考えや思いをおもしろがり、「それいいね」と取り入れていきたい。講師が、研修生に寄り添い、感想を大切に受け止めて紹介してくださり、気持ちが前向きになった。